

博士論文審査報告書

2021年度 流通科学大学大学院博士論文審査報告書

2022年2月10日

指導教授（主査）

白 貞壬



1. 博士論文題目 「観光プロセスにおける観光客の観光行動に関する研究」

2. 執筆者

学籍番号 85190012

氏名 ギミレ アニル (Ghimire Anil)

3. 論文内容の要旨

観光における出発地およびデスティネーションの変化や観光経験の変化によって、観光客のニーズや行動にも変化がもたらされることから、観光客はいかなる観光経験をすれば、観光満足が高まるか、また観光客を満足させる新しいツーリストプロダクトは何かを明らかにしている。そのために、全体の観光プロセスにおける4段階（予想・移動・実現・回想段階）ごとの観光行動をそれぞれ分析する必要があると主張している。

予想段階では、デスティネーションに対する知識や情報の範囲が広がると、デスティネーション・イメージも高くなり、デスティネーション・イメージが高くなれば、デスティネーション決定に阻害要因の影響は弱くなり、観光モチベーションが向上することが明らかにされた。また、デスティネーション・イメージを構成する認知的要素と感情的要素がデスティネーション決定に強く影響することが確認された。

その後の移動段階では、観光満足に決定的に影響する中核経験の範囲がデスティネーションだけにとどまらず、移動中の観光客の記憶に残る経験にまで広がることが強調された。観光客の中核経験範囲を移動ルートごとに細かく分けることによって、旅程全体に対する観光客の満足度がより高くなることが明らかにされた。

実現段階では、デスティネーション・イメージが観光モチベーションに反映されるため、それがデスティネーションでの観光行動に与える影響が分析された。その結果、デスティネーション・イメージの認知的要素より、感情的要素のほうが観光客の満足に大きな影響を与えることが確認された。

続いて、観光客の観光モチベーションとなる新奇性欲求が観光経験の回想段階における観光行動の分析を通して明らかにされた。リピーターの観光客にとって矛盾するような新

奇性欲求の意味をいかに捉えるべきかを検討した結果、熟知度の高いデスティネーションで同じことを繰り返し経験しても観光客の観光時の状況（旅行パートナー、旅行期間、年齢、収入等々）が異なるのであれば、それは新しい経験になることが確認された。

観光客の新奇性欲求には、全く経験したことのない新しいものや非日常性に加えて、経験したことがあっても観光客の観光時の状況の変化に対応すべき欲求も含まれることが明らかにされた。結局、観光モチベーションとなる新奇性欲求は、もっぱら観光関連事業者によって実現するのではなく、観光客の置かれた状況に少なく依存することが強調された。その考え方が観光関連事業者の認知的要素と観光客の感情的要素がうまく重なり合う中で、新しいツーリストプロダクトの開発に繋がっていき、それが観光客の観光満足に対応することが示唆された。

観光プロセスにおける全体的観光経験の分析から以下の理論的成果が見られる。まず、デスティネーションの新奇性と熟知性の両方の属性が観光モチベーションに大きく影響を与える。次に、出発地とデスティネーションの間の移動ルートの一つの観光地と捉えることによって、より豊富な中核観光経験の多様性が生まれる。加えて、デスティネーション・イメージの認知的かつ感情的要素がデスティネーション全体の満足に影響を与えると指摘している従来の研究に対し、その感情的要素のほうが最も大きな影響を与えるという本論文の主張は、デスティネーション・イメージが観光経験に与える影響に関して新しい知見を提供できた。もう一つは、新奇性欲求と観光モチベーションとの関連性を明らかにした点である。新しいものを新奇性と捉えることの多い従来の研究に対し、新奇性の概念を新しく捉えなおすことによって、再度同じデスティネーションを訪れる観光客のモチベーションや行動がよりの確に判断できるようになった。

4. 論文審査結果の要旨

観光客の観光行動を観光目的地に限定して捉えるのではなく、観光モチベーションが生れる予想段階から、目的地への移動段階を経て、観光モチベーションが実現する段階、出発地へ戻ってきてこれまでの経験を回想する段階まで、全体の観光プロセスに跨っての「全体的観光経験」の分析が試みられている。だが、それぞれの概念規定や事実認識についての論証が必ずしも十分ではなく、論理展開においても飛躍や強硬な点があることは否定できない。

博士論文の検討対象としている、全体の観光プロセス、全体的観光経験、ツーリストプロダクトの大きく3つのキーワードは、4段階ごとの観光行動や観光経験の分析に当たって、それぞれのトピックが独立的に扱われている。なぜそれらの問題を1つの論文の中でまとめたのか、筆者の論説が見られない。つまり、筆者が本論を4章構成とした各章の研究についての俯瞰的な連関の説明が欠けているのである。博士論文をつらぬく筆者の分析視点は何であるのか、その整合性と一貫性をどのように説明するのかが見当たらないのである。

最後の問題として、調査対象について、エベレストとその周辺地域を訪れたトラッキング

グの観光客以外に、日本を訪れたイスラム教徒や、沖縄に再来したリピーターの観光客を対象にしているが、予想段階における観光モチベーションとなる新奇性欲求と、回想段階を経てリピーターの再来訪意向の相違を研究する際には、日本の 2 つの調査対象は論点を明確するのに阻害要因になる。

以上のような問題点を指摘することができるが、それは博士論文の評価を下げるものではなく、筆者の将来の研究に対する期待を表明したものであると見てよい。日本を訪れているイスラム教徒の観光モチベーションと実際の観光経験がインタビュー調査から検討されるが、このインタビュー調査は探索的な情報収集を目的に行われているとはいえ、宗教的規律の厳しさをもち、慣習も大きく異なるムスリムのインバウンド客を受け入れるためにも実務的示唆に富んだ初期の研究として十分な資料的価値を有している。また、エベレストのような観光資源を周辺とした地域をデスティネーションとして決定した潜在的観光客に、エベレストの印象がポジティブな影響をもたらし、その感情的要素の影響で、実際、デスティネーション全体の満足度が高くなることが提示される。この解釈は実態調査の単純集計結果ではなく、複数の変数間の仮説的な因果関係を検証した、共分散構造分析 (SEM) を用いたものである。デスティネーション・イメージの認知的・感情的変数がデスティネーションを決定した後、デスティネーションでの観光行動に与える影響を明らかにした研究で、デスティネーション・イメージと観光満足との関係を考える上で貴重な資料となっている。

総合的にみて、ギミレ氏の研究は、研究対象についてまず膨大な先行研究レビューを基に理論的背景を明らかにし、それに基づく発見ないし結論はユニークであり、学術的にも十分な意義を有している。様々な問題に研究関心が向けられており、個々の問題に対する記述や論証は必ずしも十分ではないという印象も受けるが、それは観光をめぐる多様な問題に対するギミレ氏の知的的好奇心と学問的関心を反映するとはいえ、この点の充実をギミレ氏に今後期待したい。

ここに、審査および口頭試問の結果を踏まえ、審査員一同はギミレ アニル氏の博士の学位を認定するものである。